【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	徳島県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	徳島市渋野小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	２	１	１	１	１	１	８	１３
児童数	３２	４４	３５	３８	３３	３４	２	２１８	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

児童一人一人の確かな学力の向上をめざした学習指導のあり方を求めて

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

１年生・国語　（学習の基礎となる聞く力・読む力・書く力を身に付けさせたいため）
２年生・算数　（九九を中心とした基礎的な計算力や考え方を身に付けさせたいため）
３年生・算数　（子どもの実態に応じたＴＴ指導・個別指導を実践しているため）
４年生・国語・算数（子どもの実態に応じたＴＴ指導・少人数指導を実践しているため）
５年生・算数　（子どもの実態に応じた少人数指導を実践しているため）
６年生・算数　（子どもの理解に応じた少人数指導を実践しているため）

（２）年次ごとの計画

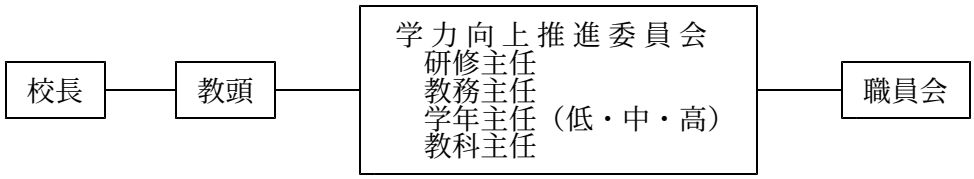
平成14年度	○テーマ　　基礎基本の定着を図る学習指導の工夫 ○研究の見通し（仮説） 　児童が確かな学力を身に付けるためには，まず，教師の確かな指導力に裏打ちされた授業実践の充実が前提になるであろう。どのような授業実践をすることが基礎基本の定着を図ることにつながるのだろうか。授業実践を通して，教師が指導力の向上に努めることが確かな学力を育てることになるのではないかと考える。そのためには，確かな学力形成のための教師間の意思統一を図り，授業実践の成果を日々の学習指導に生かすことができるようにすることが重要となる。各学年の発達段階に応じて，指導形態や指導方法をどのように工夫改善していくことが基礎基本の定着を図るために効果的なのかに重点を置き，研究に取り組む。 ○研究内容・方法 ①教科における取り組み 　子どもの実態に応じてＴＴ指導・少人数指導を取り入れることにより，一人一人にきめ細やかな指導ができるように取り組んだ。どのように指導形態や指導方法を工夫することが効果的なのか研究した。また，特に基礎学力のついていない児童に対して，保護者の理解を得た上で個別指導（通級指導）を実施し，個々に応じた指導方法の工夫改善に努めた。 ②特設した学習の時間における取り組み 　始業前の１０分間を「朝の読書」・「ドリル学習」の時間として時間割に組み入れ，全校一斉に読書習慣の育成と基礎基本の定着をめざして取り組んだ。 ③基礎基本の定着を図るための教材・教具の開発 　朝のドリル学習で使用する基礎基本の内容の教材や，理解の程度に合わせた教材，理解や思考を助けるための教具の開発・工夫に取り組んだ。

平成15	○テーマ　　確かな基礎学力を育てる学習指導の推進 ○研究の見通し（仮説） 　児童に確かな学力を定着させるためには，学習活動の目標の設定とそれを達成するための指導方法の研究のもとに，授業実践を進めることが重要であると考える。分かる授業の推進が児童の学ぶ意欲につながり，基礎学力を育て，定着させることになるであろう。 　そこで，平成14年度の取り組みを反省し，工夫継続していくと共に，毎時間の授業の積み重ねこそ確かな基礎学力を育てる大切な時間ととらえ，授業研究を中心

年度	に研究に取り組む。また，「生きる力」につながる基礎学力として，全教育課程の中で，課題設定能力，問題解決能力，自己表現能力などを身につけさせるための指導方法を研究する。 〇研究内容・方法 ①国語科・算数科における授業研究 ②ＴＴ指導・少人数指導・個別指導の工夫改善 ③特設した学習の時間の効果的な指導方法の研究 ④生きる力につながる教育活動の実践

平成16年度	〇テーマ　確かな学力向上をめざした学習指導の充実 〇研究の見通し（仮説） 継続的な取り組みを工夫することで，すべての児童に基礎基本を習得させ，「やればできる」という達成感を味わわせたい。しかし，教師主導の指導によるものではなく，児童自らの学びたい意欲を育てることにより，確かな学力の向上が実現していくものと考える。そのためには，教師の力量がより一層求められるところである。 「できる喜び，分かる楽しさ」を味わわせる授業を実践するとともに，「もっと学びたい」気持ちを引き出し，意欲を高めていく取り組みをさらに工夫改善していくことで，学力は向上していくであろうと考える。同時に，全教育活動を通じて，「生きる力」の育成につながる教育実践も大切である。． 児童一人一人を見つめ，それぞれの実態に応じて，確かな学力向上のためにできることは何か。過去二年間の取り組みの成果と課題をふまえ，客観的な評価の上に立って研究に取り組む。 〇研究内容・方法 ①基礎基本の充実のための手だて ②過去二年間の反省の上に立った指導方法の工夫改善 ③評価を指導に生かす工夫 ④教師の指導力向上のための取り組み

（３）研究体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果および今後の課題

１．研究の成果

（１）教科における取り組みについて

① TT 指導

＜国語科（１年生）において＞

・　学年当初，子どもの実態を把握するために，平仮名習得数を調べたところ，75 ％の児童が 40 音以上の平仮名を書くことができたが 12 ％の児童は半数以下の習得数であった。入学時でありながら，読み書きの力は非常に個人差が大きかった。しかし，ＴＴ指導により，鉛筆の持ち方や平仮名の習得など，一人一人にきめ細やかな指導をすることができた。

・　子どもの実態に応じた指導ができるように，書写担当教師と連携したり，TT 担当教師と協力体制をもったり，一人一人に応じた指導ができるように取り組んだ結果，１学期末にはほとんどの児童が平仮名を正しく習得することができた。

・　学習の入門期である１年生の国語科の学習は大変重要である。一斉指導だけでは，筆順など気がつけば間違ったまま書いているのを見逃してしまう場合もある。ＴＴ指導で個別に関わることにより，その都度繰り返し書き直させることができ，指導を徹底することができた。

・　「書く」学習の際には，水書板を使って「とめ」や「はらい」などに留意して書く習慣を身に付けさせるように工夫した。また，四つに区切った一マスの方眼の中に字形に気をつけて書くことができるように心がけた。また，実物投影機に友達の書いた字を大きく写し出し，正しく書けているかどうかお互いに確かめ合うなどした結果，子どもの関心や意欲が長く続き，「とめ」「はらい」などに気をつけようとする意識が高まった。

・　TT 指導により，子ども達一人一人のつまずきや実態を的確に把握することができた。

＜算数科（２年生）において＞
・　二人の教師で指導することで，子ども達を多面的に把握することができた。より客観的な評価をするのに有効であった。
・　単元ごとにＴ１，Ｔ２が入れ替わる方法で指導した。授業後に遅れがちな子どもの理解の程度やよくがんばっていた子どもなどの情報交換を行って，子ども理解に努めた。
・　学習の特に大事なポイントでは，臨機応変に二人の教師で指導を補い合うようにしたことで，子ども達は集中して話を聞くことができ，理解や思考が深まっている。九九の学習を一人で指導した後とＴＴ指導をした後の子どもの感想では，「よく分かった」という感想を持つ子どもが多かった。
・　二人の教師がいることで，一人一人に目が行き届き，子ども達のつぶやきや疑問などにその場で対応することができた。きめ細やかな指導ができるとともに，子ども達も教師に分からないところを尋ねやすい利点がある。TT 指導の時間を楽しみにしている子ども達も多い。

＜算数科（３年生）において＞
・　初めて TT 指導を導入した学年であるため，TT 指導者に児童の状況を把握してもらうため，担任は常に子ども達の日々の様子を知らせ，落ち着いた雰囲気で学習ができるように努めた。
・　子ども達の興味・関心，学習意欲，学習態度，到達度にかなりの個人差があるため，二人の教師で子ども達を観察することで，一人一人をより客観的に観察，支援，評価することができた。
・　算数テストの平均点で，９０点以上が１学期は４５％であったが，２学期は５１％に上昇し，７０点以下が１７％から１１％に減少した。また，５７％の児童が平均点が上昇し，学力が定着しつつあると言える。

＜国語科（４年生）において＞
・　その日の実態に応じて，支援が必要な児童に T2 の教師が個別に関わることができ，落ち着きを増したり，集中力を高めたりすることに役立った。
・　二人の教師が分担することで，一人一人の学習の進度を把握して，適切な助言や評価をすることができた。
・　特に，作文指導などでは，二人の教師がいる利点は大きい。段落や句読点などのきめ細やかな指導をすることができ，子ども達に充実感や達成感をもたらすことができた。
・　授業の導入時に，音読や漢字テスト，フラッシュカードで漢字の復習をしている間に，T2 の教師が前日の宿題の漢字プリントやその時間に実施した漢字プリントをチェックし授業の終わりに間違いを直すという展開で，一時間の授業が基礎基本を定着させるために充実したものになった。
・　国語テストの平均点で９０点以上が１学期は１３％であったが，２学期は１６％と上昇した。また，７０点以下が１６％から５％となり，学級全体の学力が向上しつつある。

②少人数指導
＜算数科（４年生）において＞
・　等質に分けた少人数指導を実施している。単元を通して二人の教師が指導に当たれるように，単元の区切りのいいところで子ども達が教室を変わるようにした。二人の教師が協力して全体を指導することができ，子ども達のつまずきや弱点に対して，お互いに指導を補い合うことができた。
・　少人数にすることで，一人一人に関わる時間が増え，落ち着いた雰囲気で学習ができた。教師も子ども達も，お互いに気持ちにゆとりを持って取り組むことができた。
・　一人一人の学習の様子が見えるため，多様なつまずきに早く気づくことができ，適切な助言をすることができた。
・　理解の遅れに対して個別指導を充実させることでき，学習の達成感や成就感をより多くの子どもに感じさせることができた。
・　課題が早くできた児童は，新たな課題に取り組んだり，理解の遅い児童に助言したり意欲が継続するように配慮した。
・　算数テストの平均点で 70 点以下は１学期，２学期とも 10 ％と変わらないが，90 点以上が１学期 34 ％が２学期は 36 ％と，上昇してきた。

＜算数科（５年生）において＞
・　等質に分けた少人数指導を実施している。単に少人数での一斉指導にならないよう

に子ども達が意欲的に取り組めるよう問題掲示を工夫するとともに，個に応じた教材の開発やきめ細やかな机間指導を心がけ，基礎基本の定着を図るよう努めている。
・　子どもの声として「算数は苦手だったが好きになった。」「すぐ順番が回ってきて，他の授業よりよく発表できる。」「少人数なので間違えても恥ずかしくない。」「先生が一人一人に詳しく教えてくれる。」「よく分からないときに，分からないと言いやすい。」などが挙げられ，昨年より算数の少人数指導を継続している成果が表れている。
・　学習内容が難しくなる高学年においても「算数が好きになってきている。」と答えた子どもが６割を越え，少人数による満足感や達成感が十分味わえていることが分かる。
・　二人の教師が協力して指導計画を立てたり，教材教具を準備したりすることで，能率良く授業を進めることができる。お互いの教育技術を学び合い指導力を高め合うことができた。
・　少人数担当指導教師は多学年に関わって指導しているため，学習内容の関連がよく分かる。そのため，理解の不十分なところに戻って，適切な個別指導をすることができた。

＜算数科（６年生）において＞
・　１学期は，各単元に入る前に既習事項のミニテストを実施し，等質の２クラスにわけ，少人数指導を行った。その結果，個々の習熟度が分かるとともに，授業中の個別指導がスムーズにでき，つまずきに対応しやすかった。
・　一人一人に目が行き届くことができるため，ノートのチェックや理解の遅い子どもへの指導に時間をかけることができた。
・　２学期は，ＴＴ指導と少人数指導を組み合わせた授業を展開した。前半はＴＴ指導により新しい学習内容を一斉指導し，練習問題をする。できた児童は，隣の学習室で，発展問題に取り組み自分で答え合わせをするという授業の流れにした。担任は，教室で理解の遅い子どもに基礎基本の指導をし，Ｔ２は発展的な指導をすることができ，子ども達の学習意欲がめざましく向上した。
・　２学期後半より，保護者の理解を得た上で習熟度別指導を導入した。単元の導入時はホップタイムで一斉指導し，その後ステップコース，ジャンプコースに別れた。算数に対して苦手意識をもっている子には,数値を易しくしたり具体物を用いたりして，できる喜び分かる楽しさを味わわせ，進んでいる子には，より複雑な発展問題に挑戦することで，さらに高い成就感をもたせることができた。
・　テストの平均点で，９０点以上が１学期３８％だったのが，２学期には５１％と向上している。また，半数以上の子どもが１学期より平均点が向上しており，学級全体の力の向上が明確に表れている。

③個別指導
昨年度の３学期より継続して，特に基礎学力のついていない児童（４年生３名・５年生２名）を毎日１時間，個別指導を実施している。
・　四則計算はほぼできるようになった。５名とも能力的によく似ているので４年生の教科書にそって学習している。
・　少人数のため，言葉，顔，態度，ノート等を見ると理解度がすぐに分かり，指導と評価を同時進行で行うことができた。
・　分かっていないときは，取りこぼしている段階へ戻って，具体物を使ったり，体験化させたりして，できることの徹底を図ることができた。
・　「分かってきたぞ。」「簡単だ。」「やった。」等，つぶやきながら取り組んでいる。分かる楽しさやできる喜びを感じながら，学習することができた。

（２）特設した学習の時間における取り組みについて
①朝の読書
・　昨年に引き続き，週２回，全校で１０分間読書を行っている。
・　１年生では読み聞かせからスタートした。始まると，教室は一瞬にして静まり，子ども達の瞳がきらきら輝く。子ども達は本の世界へと導かれ，その世界に浸る。入門期である１学期には，本に親しみ，慣れることが大切だと考え，読み聞かせに取り組んだ。
・　１年生の２学期からは，自分で読書をしている。初めはなかなか本を選べずにいた子も，最近では，言われなくても読書をするようになった。読書へのアニマシオンという手法を取り入れて，遊びを通して読書が好きになるように支援したところ，読書の時間でなくても，進んで本を読んでいる子どもの姿が見られるようになった。
・　語彙が豊富になり，考える力が付いてきて，発言や文章の中身が豊かになってきた。
・　２年生では，「いのちの学習」に合わせて，学級文庫の図書を揃えたり，読み聞かせをしたりして，ねらいを持って読書指導を行った。子ども達の興味関心が高まり，「いのちの学習」に成果が反映された。これを契機に，その後の図書の選択にも変化が見られた。

・　帰りの会で，子ども達が輪番で，読んで良かった本をみんなに紹介している。
・　読書の時間が子どもたちにも浸透しており，自分から読書に取り組むことができ，静かに一日がスタートしている。学校全体が一斉に行う朝の読書が成果を上げてきている。
・　図書コーナーに新しく入った図書（中学年では，かいけつゾロリシリーズなど）は大人気で，喜んで読んでいた。お互いに感想を言い合うなど，読書を通して，子ども達の仲間意識が強まっている。
・　上学年では，「読書タイムまでに本を選んでおく。家から読みたい本を持ってきても良い。黙読する。」などの約束をしている。
・　子ども達が興味・関心を持ちそうな本をそろえたり，入れ替えたりして，読書への意欲が継続するように配慮している。
・　４年生では，「おすすめの本」としてあらすじやイラスト等を書いて掲示するなど，読んで良かった本を紹介するコーナーをつくった。
・　５年生では，最近６年生のコーナーまで足を伸ばし，歴史に関する本や中沢啓治の平和シリーズなど興味ある本を持ち帰り，休憩時間にも読書に没頭している子を見かける。
・　読んで良かった本を紹介したり，私物でも本棚において提供したり，新書購入の希望が出たりするようになった。わずかな時間でも，「時間を保証する」ことで，読書好きの子を育てていると言える。

②ドリル学習
・　昨年に引き続き，週２回，全校で１０分間，漢字や計算のドリル学習を行っている。続けることで学力の向上に役立っている。
・　１年生では計算カードを繰り返し練習し，初め１０分以上かかっていた子どもが３分でできるようになった。
・　２年生では，時間内に計算と答え合わせを主に行い，繰り返し学習により成果を上げている。２学期からは係の子が自主的に自作のプリントを作成し，「今朝の問題は〇〇さんの問題」として，全員で解いている。子どもの問題は教師が添削を行っているが，子ども達は意欲的に問題作りに取り組み，それぞれの子どもに力がついてきている。
・　基本的な内容を繰り返し学習し，より早く正確にできると「できた。」という充実感を味わうことができ，新しい内容への意欲も高まり，取り付きやすくなる傾向が見られた。
・　４年生では，主に計算・漢字ドリル，計算・漢字パワーアップなど市販の教材を用いて，計算力の向上や漢字の習得を目指している。今では習慣となり，時間がきたら自主的に課題に取り組むことができている。課題が解けた児童から教師がチェックし，間違いをすぐ訂正して，裏に再度練習するようにしている。繰り返しドリル学習をすることで，基礎基本の定着に役立っている。
・　５年生では，テストの漢字を練習用紙で家庭学習し，翌日，漢字テスト（１０点満点）を行っている。その結果，下記のような結果が出ている。

内　　容	１ 学 期	２ 学 期	成　　果
学級の平均点	７．６	８．４	全体的に向上している
平均点が９点以上の子	４１％	５３％	１２％向上している
下位５人の平均点	２．９６	５．３４	下位の子がよく努力した

　漢字が苦手であった子ども達もこつこつ努力するようになり，少しずつ力が伸びている。
・　普段から既習漢字を必ず使うように指導している。毎日の日記の中では既習漢字を使って書くことを目標にし，書けた日にはシールを貼るなどしていると，意欲も高まってきている。

（３）生きる力につながる教育活動について
①ＩＴ活用授業
・　子ども達はパソコンが大好きである。算数科を中心にいくつかの教科でパソコンを利用した学習を積み重ねているため，簡単な操作なら自分で喜んで取り組むことができた。
・　学習のまとめの段階では，板書代わりとして利用した。アニメーション機能も活用して，分かる授業のために役立てている。
・　視覚的な画面や簡潔な操作は，子どもの思考を助けるとともに，興味や意欲を継続させるのに有効である。
②自主学習
・　学年当初に「自主学習の手引き」を配布し，週一回家庭学習としてじっくり取り組むように助言した。回を重ねるごとに，今学校で学習していることをさらに深めたり，興味関心のあることについて継続して調べたり，自分なりに考えて学習する子が

増えてきた。
・　自ら調べたことは，即自分の力となり，知識や理解が深まり，学習全般に確かな向上が見られる。朝の会やスピーチで紹介し合い，学級全体に伝えるようにしている。
・　テスト勉強を計画的に進めるなど，友達といい意味で競争しながら自主勉強に取り組めるようになってきた。参考になるような自主学習ノートを紹介するうちに，「机に向かう時間が増えた。」「新聞を読むようになった。」などの保護者の声も聞かれた。
・　６年生では，今学習している内容だけでなく，小学校６年間の総まとめと卒業論文づくりを主な課題として取り組んでいる。

２．今後の課題
（１）教科における取り組みにおいて
・　特に支援を必要とする児童に対しての効果的なＴＴ指導を研究する必要がある。
・　二人の教師の連携をより効率的にする工夫やＴ１，Ｔ２の教師の位置づけを明確にしておく必要がある。
・　学力の高い児童の能力をさらに向上させる指導方法を研究しなければいけない。
・　楽しくよく分かる授業を目標に，二人の指導者が実態把握と指導事項を十分分析した上で，授業を組み立て，実践，評価をしていく必要がある。
・　習熟度別，課題別等，子どもの個性や個人差等実態に応じてクラス分けを工夫し，一人一人の学力の向上を図らなければいけない。
・　個別指導は，通級という形のままでは効果が定着しにくいため，週時数を増やすなどの対策をしなければいけない。

（２）特設した学習の時間における取り組みにおいて
・　同じような内容の本ばかり読んだり，読書にあまり興味を示さない子どもへの支援をさらに工夫しなければいけない。
・　図書を購入する際には，児童の希望も取り入れて図書を選ぶことを取り入れたい。
・　ドリル学習では基本的な問題ばかりではなく，個人差に応じた課題も準備し，子ども達の興味や意欲が持続するような工夫をしなければいけない。
・　継続することが定着への第一歩なので,繰り返し学習する時間を保障すると同時に，児童に自分自身の学習成果がとらえられるように工夫して，意欲的に取り組むことができるように手だてを考える必要がある。

（３）生きる力につながる教育活動において
・　効果的にパソコンを活用できるように，授業を組み立てる必要がある。
・　子どもの多様な個人差や習熟度に対応できるように，多様なレベルに対応できる内容のソフトを準備しなければいけない。
・　各学年のＩＴ活用年間計画を作成し，段階的に子ども達にパソコン活用能力を育てていかなければいけない。
・　自主学習はあくまで子どもの自主性に任せている。放課後の生活や家庭環境も様々で，落ち着いて学習に取り組めない子ども達もいる。そうした子ども達や，まだ意識が高まっていない児童に対する指導の工夫が必要である。

Ⅳ．学力等把握のための学校としての取り組み
＜定期的な学力調査の実施＞
国語と算数の基礎学力テストを全学年において実施する。
（１）平成 14・15 年度　　学年末に実施し，次年度の指導に役立てる。
（２）平成 16 年度　　学年末に実施し，学力の推移の実態を把握する。

Ⅴ．フロンティアスクールとしての研究成果の普及
１．研究会の実施
平成 15 年 12 月 4 日（木）　渋野小学校６年
講師先生を招いて，算数科の効果的な少人数指導のあり方を研究した。
平成 16 年 1 月 22 日（木）　渋野小学校１年
国語科における TT 指導授業研究会を実施した。
平成 16 年 1 月 29 日（木）　渋野小学校２年
講師先生を招いて，算数科における IT 活用授業研究会を実施した。

２．研究授業公開　平成 16 年度実施予定
学力向上フロンティア校研究発表会の実施を予定している。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　■７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　■国語　□社会　■算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無